



No. '23-2

(No.113)

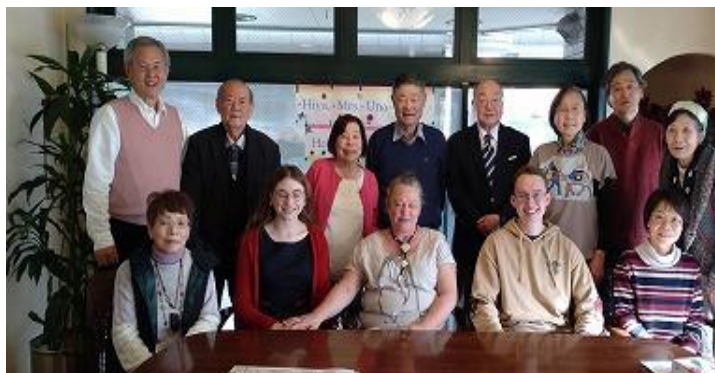
Apr. 2023

ISGG NEWSLETTER

伊東市善意通訳の会

C O N T E N T S

- | | | |
|------------------------------|-----------------|----|
| 1. トイレの話 | 会員 菊池善次郎 | 2 |
| 2. 盛会だった第3回英語講演会 | 会員 小西恒男 | 5 |
| 「1937年の壮大な飛行：東京からロンドンへ」 | | |
| 3. My Life in Ito | ALT Katie Power | 10 |
| 4. 「JNTO 善意通訳者表彰状」を頂き皆様への感謝状 | 会員 加藤達雄 | 12 |
| 【事務局便り】 | | 14 |
| 【編集後記】 | | 15 |



Katie のお母さんの歓迎会

トイレの話



会員 菊池善次郎

トイレは私たちの生活に欠かせない設備です。健康で文化的な生活の為にトイレは必要不可欠な設備です。更にトイレは人間の尊厳を守る為にも必要です。だから家を建てる時はまず 100%の人がトイレを作ります。美術館、博物館、映画館、野球場、病院、学校、駅、公園、ショッピングセンター、高速道路のサービスエリア、その他もろもろの公共施設や人の集まる場所/建物には必ずトイレがあります。

人は時々「自然に呼ばれる」(Nature calls me)からです。

さて、私たち伊東の観光スポットにはユニークなトイレが市内 38 個所に完備されていることは有名です。海岸、湖畔、公園、散策路などなどの屋外観光スポットに建てられています。昔、案内人現役中、城ヶ崎海岸門脇埼灯台・吊り橋を案内している時です。お客さんから「あそこの小さな喫茶店の様な建物は何か？」と聞かれたことがあります。「あれはトイレです。名前を“半四郎の落とし処”と言



“半四郎の落とし処”
城ヶ崎海岸門脇灯台の山側

います」、「へえー、そうですか。トイレにしてはユニークな建物ですねえ。名前もちょっと面白い！」。

そこで覚えたばかりの^{うちく}蘊蓄を披露。「伊東市は 1980 年代頃より観光スポットのあちらこちらにユニークな名前の付いた一見茶屋風の建物の観光トイレを整備してきました」からスタート。簡単に説明したところ。「因みに、(読者の皆さんご存じの通りですが)、“半四郎の落とし処”“は近く



“磯ぎ久の詩野箱”
門脇吊り橋のすぐ近く

の崖（溶岩トンネル跡）の名前と今は昔のトイレをイメージし命名されたものです。今は「半四郎の流し処」がいいかもしれませんね」などなど。

「門脇吊り橋の北側にあるトイレは“磯ぎ久の詩野箱”という名前ですが、「磯ぎ久」＝「磯菊（インギク）、晩秋に咲く城ヶ崎海岸の有名な花」のこと、「詩野箱」＝「中国の昔の便器」のことです。

「城ヶ崎海岸の散策路、ピクニカルコースと自然研究路（計 9Km）だけでもこの様なトイレが全部で 8ヶ所あります。

名前だけでも列挙すると、上記の他、“^{はれー}私、スイセン 86”、“^{しおさい ちゆうずどころ}潮騒の手水処”、“^{かわや}磯の香和家”、“^{ささみ}篠海の^{せつちんどう}青椿堂”、“^{せいらくあん}いがいがの静落庵”、“^{よど まるや}淀の円家（台風で崩壊）”です。その他、大室山、小室山、さくらの里、一碧湖、宇佐美海岸、伊東港、奥野公園などなど、現在市内 38ヶ所にこの様な観光トイレが整備されています」
…など。（略）

以前観光地を旅行した時、何処とは言いませんがトイレが見つからない、あっても汚い/衛生的でないという場面がありました。その町全体の印象を悪く思いました。

私は観光地に必要なことは先ず安全。次にきれいなトイレが完備していることではないかと思えます。訪れるお客さんの町のイメージがぐっと良くなると思えます。

その意味で伊東市が早くから観光トイレの整備に力を入れたことは「正解だった」と考えます。

とは云え、伊東市は広い。観光スポットはあちこちに広く散在しています。野道、山道、海岸路ありです。お客さんから「すみません、近くにトイレないでしょうか？」と聞かれたとき、いつ^{なんどき}何時でもそちらの「ご案内」も出来る様に事前にチェックし確認しておくことが大切です（そう心がけました）。

最近人気スポットとして株を上げている城ヶ崎海岸橋立の大淀・小淀/吊り橋付近、崖の上に以前はトイレがあったのですが老朽化し台風の被害で崩壊、使えなくなりました。伊東市は再築を検討しましたが地権者との問題があって不可。やむなくコースから外れて、歩いて 15 分かかる集落近くの市営駐車場に新しくトイレ（名称：橋立観光トイレ）を作らざるを得ませんでした。自然研究路の散策にはそ



“さくらのお陽殿（さくらのおひどの）”
「お陽殿」＝「平安貴族のトイレの意」
大室山の麓（さくらの里）

の辺のトイレロケーションを頭に案内が必要です。

パワースポットとして有名な八幡宮来宮神社の案内。トイレはあるにはあるのですが長い間他人にはとてもとてもお薦め出来る様な状態ではありませんでした。伊東市はその後 2020 年に立派なトイレを新築しました。

伊東市のシンボル「大室山」の案内の場合は山頂でも麓でも立派なトイレが複数完備しており安心してお客さんの案内ができるスポットでした。

一般論ですが、「日本は世界一トイレがきれいで完備している国」ということです。調べて見ますと世界ではまだまだトイレがない国がたくさんあります。2017 年のユニセフの調査結果ですが、世界の総人口 80 億人の内 20 億人がまともなトイレがないということです。4 人に 1 人にまともなトイレがないということです。もっと具体的に云うと、約 7 億人が家に全くトイレがなく野外で排せつを行っている。

約 7 億人がバケツに排せつか川や池に直接排泄などしている。そして 6 億人がトイレはあるが衛生的にまともではない設備を使っていると云うことです。主にアフリカや東南アジアの一部の国ということです。この数は年々減少はしているとのこと。何れにしても日本に生まれて万歳か・・・。

以上、くだらない話ですみません。しかし、くだった時には納得して頂ける話だとは思いますが。

盛会だった第 3 回英語講演会

「1937 年の壮大な飛行：東京からロンドンへ」



会員 小西 恒男

2023 年 4 月 16 日（日）、伊東市観光会館会議室において ISGG 主催による第 3 回講演会を実施した。

講師の ” Martin J. Frid ” さんはスウェーデン生まれで、現在は日本人の奥様と伊東での充実した

生活を送りながら、全国的に幅広い活動をしている 60 代の素敵な男性である。

マーティンさんは以前から日本の航空の歴史に興味を持ち、調査研究を重ね“Kamikaze to Croydon”の名前で本を出版されている。今回この本の内容を中心に講演していただいた。

尚、今回の講演の参加者については事前参加の申し込みが大変鈍く少し心配であったが、いざ蓋を開けてみると全くの杞憂で用意した席はほとんど埋まるほどの盛況でまずは一安心であった。

定刻の 2 時になり、主原事務局長の司会で講演会が始まった。稲葉会長の英語による歓迎挨拶の後、マーティンさんの講演に移った。



自己紹介ではスウェーデンのマルメ市生まれ。1988 年に英語教師として来日。2003 年に再来日し、NHKワールドに勤務して消費者運動、特に食品安全運動などを手掛けてきた。現在無農薬野菜の普及に携わっている。2021 年より伊東に居を構える。趣味はガーデニングと陶芸である。

いよいよ本題に入る。1937（昭和 12）年 4 月、飯沼正明（パイロット）と塚越賢爾（機関士）2 名の民間機が東京からロンドンまでを 4 日間で飛行し、飛行時間の世界新記録を樹立する話である。

講演はプロジェクトにより貴重な写真など 10 数枚を使って詳細に説明してもらった。

本日の講演に合わせて塚越賢爾機関士の孫である塚越裕爾氏がわざわざ東京から駆けつけていただいた。（講演の最後に司会者より紹介があった。裕爾氏は現在フジテレビの取締役を勤める）

講師が最初に言及したのは「今回の話は

“Civil Aviation”（民間航空）に限定しての話である。

つまり戦争については触れない」ということであった。

以下内容を紹介する。



KAMIKAZE 号に乗る飯沼、塚本両氏

1) この時代（1930年代）の民間機を保有する会社は新聞社である。朝日新聞社と毎日新聞社が夫々保有しており、スクープ合戦を繰り広げていた。（台湾、中国大陸の一部も日本の領土であった）

2) 最初に出来た民間飛行場は所沢（埼玉）で、羽田飛行場は1931年に完成したが、最初の呼び名は平和島飛行場であった。1933年には沖縄に飛行場が出来た。

3) 航空機メーカーは「MITSUBISHI」（三菱）と「NAKAJIMA」（中島）があった。また川西というメーカーが水陸両用機（Flying boat）を製造していた。三菱は現在の三菱重工、中島は富士重工（スバル）である。中島の前身は繊維の紡錘機械を製造する会社であった。

4) 東京→ロンドン飛行

1937（昭和12）年4月、朝日新聞社のマークをつけた飛行機”KAMIKAZE”号が立川飛行場を出発、ロンドンを目指して飛び立った。乗員はパイロットが飯沼正明（24歳）、ナビゲーターが塚越賢爾（36歳）の二人。台湾、ベトナム、パキスタン、バクダッド、ローマ、パリ空港等を経てロンドンのクロイドン空港に到着。目標の航空時間4日間・100時間以内の飛行時間を無事達成、結果として世界新記録の快挙を達成した。



<Croydon 空港に着陸した KAMIKAZE 号の快挙を祝う人々>

飯沼、塚越の二人は行く先々で大変な歓迎を受けており、イギリス駐日大使であった吉田茂（後の総理大臣、日本のチャーターと呼称）の祝福を受けたのは言うまでもない。

4月9日、飯沼・塚越飛行士はロンドン GPO 放送局より日本に向け放送し、日本国民に飛行報告を行った。



Martin さんの話の中で、この飛行について

” Good timing ” という言葉が印象的であった。

昭和 12 年と言えば、3 か月後（7 月）には日中戦争が勃発、以後日本は軍部の主導で戦争へ突入してゆき、この時期が民間飛行ぎりぎりのタイミングであった。

また、この年はイギリスでジョージ 6 世の戴冠式があり、朝日新聞社はどうしても自社機でロンドンへの飛行を成功させたい（スクープをとりたい）と考えていたので、飛行において資金面の心配はなかった。将に ” Good timing ” であったのである。

5) 塚越機関士の母親について

ここで塚越さんの母親について大変興味ある話があった。

塚越さんは Croydon 空港で心密かに母親を待っていたのである。実は彼の母親はイギリス人である。事情で母は英国に帰国、離れ離れに暮らしており、空港に来てくれるのを心待ちにしていたのである。しかしながら結局母親は姿を見せなかったそうである。

6) 二人はしばらくの間ヨーロッパの各国を訪問、歓迎を受けて過ごした。5 月になり帰国の途につき、無事帰国した。帰国後の歓迎は大変なものであった。大観衆が集まった神宮の上空を凱旋飛行している写真などが紹介された。

7) 飛行記録の更新を狙ってフランス人が逆ルート（ロンドン→日本）をトライしたそうである。

結果は日本まで来たが九州で墜落し、不成功に終わった話や、「翼よ、あれがパリの灯だ」

（映画）で有名なリンドバーグの大西洋横断飛行（1926 年）の紹介があった。彼は息子の誘拐

事件という悲劇に見舞われたことから、アメリカを去りその後ロンドンで余生を過ごしたことなど大変興味深い話も聞くことが出来た。

8) 世界には多くの航空博物館があるが 1937 年の二人の飛行記録を残しているのは飯沼飛行士の故郷である長野の博物館と Croydon の博物館の 2 か所のみであるとのこと

1 時間以上にわたる講演の後、質疑に移った。

多くの方が質問に立ち、講演の内容、講師個人への質問やスウェーデンの様子等、30 分にもわたり活発な質疑が行われ、最後に曾我副会長による閉会の挨拶で講演会は終了した。

講演はすべて英語で行われたが、講師の説明は大変わかり易く理解できたとの出席者の感想であった。マーティンさんの奥さん「ちほ」さんによると、「私はあまり英語が出来ないけれど、今回はよく理解できた」とのことであった。多分に謙遜的なコメントであるが的を得ていると思う。

講演会終了後、会員有志 9 名がゲスト 3 人(マーチン夫妻と塚越さん)を歓迎して懇親会を行った。懇親の席で新しい発見があった。マーティンさんと塚越さんは今日が初対面であり、塚越さんは伊東に別荘を持っており、話をしていくうちにそれが偶然にも Martin さんのすぐ近くにあること。二人とも趣味が陶芸で両者ともキルン(窯)を持っていることなど意気投合していた。

塚越さんはゴルフ事業を担当しており、4/20より川奈ホテルで開催の「フジサンケイ女子プロトーナメント」の関係者とのこと。また塚越さんが仕事上で名詞交換をした際、時折「塚越賢爾さんと関係があるんですか？」と聞かれることがあるそうである。やはりロンドンへの飛行快挙を知っている人がいることを実感することがあるそうである。裕爾さんが生まれた時に賢爾さんはすでに亡くなっており祖父の話は父親からよく聞かされていたそうである。飯沼パイロットの女房役として飛行管理など裏方としての役割の大変さを聞かせていただいた。



講演会後の懇親会

今回の講演で私は昭和12年という年に飯沼・塚越氏が民間航空機で東京・ロンドン間を飛行した話を初めて知り、大変面白く興味を持ってメモをとった。これをベースに内容を纏めてみた。

最後にこの講演を快く引き受けてくれ、大変わかり易く解説してくれました講師の Martin J. Frid さんに敬意を表し感想文とします。

My Life in Ito



ALT Katie Power

Although I only arrived in Ito City in November 2021, it feels like I have a lifetime of experiences to share. When I first learned that I would be placed in Ito City, I was admittedly nervous. I worried that I might have a difficult time making friends without many English speakers around and that I would miss out on the experiences that come with living in a larger city. But after a year and a half of living here, I can confidently say that I have experienced more than I ever could have in a big city, and I have made lifelong friends in the process. In Ito, I had the opportunity to try archery for the first time, witness the beauty of bon odori, watch traditional performances at the *sukechika matsuri*, and see *daidengaku*. I even fell in love with onsen and had some of the most delicious seafood of

my life. I also had the opportunity to present the news, watch the best fireworks show of my life, and much more.

One of the most enjoyable experiences I've had in Ito was learning to play the Koto. I had always been interested in traditional Japanese music, so when I learned that there was a local Koto teacher, I jumped at the chance to take lessons. Through my Koto lessons, I not only learned how to play the beautiful instrument, but I also had the opportunity to wear a kimono and learn many traditional Japanese songs.



小室山での琴コンサート

But what I will always cherish most about Ito is the kindness of its people. I was overwhelmed by the generosity of those who went out of their way to help me when I was sick or make my mother feel welcome when she visited me in Japan. Even my students at Ito Commercial High School surprised me with a birthday party, showing me nothing but kindness during my time here.

In addition to my experiences in Ito, I have also made great friends from attending the 'English Salon' event hosted by the ISGG. These friends have become like a second family to me, and they always look out for me, giving me the opportunity to experience new things by inviting me to their homes and different events. They have shown me so much of Ito and have even introduced me to other parts of Japanese culture that I might never have known about otherwise.

Last year, I found myself at a crossroads. My original plan was to stay in Ito City for just one year, but as my time here drew to a close, I realized that I wasn't ready to leave. I had fallen in love with this city and all it had to offer, from the kind and generous people to the delicious food and rich cultural experiences. I made the decision to extend my contract, and I haven't looked back since. Since making that decision, I have continued to explore all that Ito has to offer. I have attended even more festivals and events, each one more fascinating than the last. And I have deepened my relationships with the amazing people I have met here, building lasting friendships that I will treasure long after I leave.

One of the festivals that particularly stands out for me was the International Festival hosted by the Ito Association for International Relations. It was an unforgettable experience as I had the chance to perform Koto on stage for the first time. Additionally, I was given the opportunity to give a 10-minute presentation in Japanese about my home country, Ireland, and even sing a traditional Irish song. When I first arrived in Japan, I couldn't have imagined being able to speak in Japanese

for that length of time, let alone give a presentation in the language. It was one of my proudest moments, and it taught me that with determination and kind support from the people around us, we can achieve anything.

Despite being thousands of miles away from my family, I never feel lonely living here. In fact, I have found a new home in Ito, and I am grateful for the many experiences and friendships that have enriched my life.

「JNTO 善意通訳者表彰状」を頂き皆様への感謝状



会員 加藤 達雄

3月日の英語サロンで、主原さんから突然「表彰状があります。」と言われ驚きました。前に、功績調書のための問い合わせが主原さんからあったのですがその後すっかり失念、しておりましたら、この日の、このお話です。たまたまその日のゲスト、Paul Hoffさんから、表彰状を手渡され、感無量でした。表彰状には「表彰状・Certification of Appreciation」というタイトルが記されていますが、これは「JNTO 善意通訳者表彰」、稲葉会長によると「優良善意通訳者表彰」と言う事になります。そうすると「オマエのどこが優良で善意なのだ」と言うご意見が出て来るような気がしてきます。

2004年にこの会に入れていただき、今年は早や19年目になります。

最初の案内は、当時勤務していた川奈ホテルにお泊りの中国人のお客様でハイヤーでのご案内、その時、

全く中国語ができなかったので、退職後、中国語の勉強を始めましたが、

65過ぎの手習いで、未だ一向に上達していません。

印象深かった案内は、スペインのカナリア諸島からの家族連れ、お母さんと小学生の息子さん二人。真夏の暑い日、仏現寺→川奈ホテル→城ヶ崎海岸→サボテン公園→20世紀美術館と、ほぼ一日がかりで案内したことです。使いたくても、なかなか出番の無かったスペイン語が、やっと陽の目を見た感じがしました。

タスマニアのご家族連れ、ご夫妻とこれも小学生の男の子一人。城ヶ崎の吊り橋の脇で海を見ていたご主人が「school of fish」と言うのを聞いて school は魚などの[群れ]を言うとは辞書にあったけれど、やっぱりそう言うのだと確認し、「めだかの学校」とは良く言ったものだと納得した次第です。後日、タスマニアの写真集を送っていただきました。

サンフランシスコからのご夫妻、前日、伊東市内を案内した際、富士山が見えませんでした。明るる日、これぞ日本晴と言う青空、すぐさま宿舎に電話し、十国峠で富士山をご覧いただき、その足で修善寺までお連れしたということもありました。お土産に山葵をさしあげました。ご主人が「米国の検疫で捕まったらカトーに貰ったのだと言うつもりだ。」と笑いながら言っていました。

最近コロナの縛りもようやく緩んできました。久しぶりにオーストラリアから来日し K' s House に宿泊のご婦人にお会いしました。4年前にご案内したことがあり、私が教えている日本語教室に、わざわざ訪ねてきてくださったのです。つたないガイドの事を覚えていてくださっていて、大変嬉しく思いました。

この度の表彰で、19年間の数々の案内が、

こうしていろいろと脳裏によみがえりました。

私はガイドのレポートに、いつも「ガイドしている側が、

ガイドされる人よりも、こんなに楽しくて良いのでしょうか！」

と書いておりました。

始終楽しく案内できて、しかもこの度このような表彰状をいただけたのも、稲葉会長を始め、主原事務局、小西元事務局、会員の皆様のご支援、そして何よりもこれまで案内させていただいた諸外国が



らの旅行者の方々のお蔭と、深く感謝申し上げます。

これからも「給人一杯水，自己要有一桶水 人に一杯の水をあげるには、自分は桶一杯の水を用意しなければならぬ」（NHK 中国語テキストより）を肝に銘じ、精進して参りたいと思っております。

【事務局便り】

前回の Newsletter から当伊東市善意通訳の会は多くの活動がありました。

1) 毎月開催の英語サロンですが、通常参加してくれている ALT に加え、2 月は Jimmy Adams さん、そして 3 月は Paul Hoff さんが参加してくれ会員と幅広いトピックについて活発な会話を楽しみました。今後もいろいろなゲストの参加を予定しております。

2) 当会にとって大変うれしく誇らしいことですが、永年の会員である加藤達雄さんが日本政府観光局より 2022 年度優良善意通訳表彰を受賞されました。加藤さん、おめでとうございます。

3) 伊豆伊東高校 ALT の Katie のお母様が来日され、当会で歓迎会を開催しました。日本の印象、アイルランドの風習等で会話が盛り上がりました。

4) Martin J. Frid さんによる第 3 回英語講演会を 4 月 16 日伊東観光会館で開催しました。

この事は数度にわたり CVA テレビ及び伊豆新聞にも取り上げられ当会主催の活動として広く認知されるようになりました。又、講演会の後は Frid ご夫妻を囲んで会員有志で楽しい夕食会を催しました。



Welcome Party

第 4 回英語講演会は 11 月に Greg Helton さんによる（仮題：外国人からみた伊豆の自然のすばらしさ）について行う予定です。

5) 最後に 5 月 16 日（火）には当会の年次総会（中央会館第 1 会議室 2 時より）を開催します。22 年度の活動総括と 23 年度及び今後の活動予定を話し合います。

【編集後記】

爽やかな五月晴の毎日ですが、いつのまにかゴールデンウィークも終わろうとしています。

コロナ第9波の到来の心配の声もある中、行動制限も緩和され、コロナ禍に苦しめられた3年間の鬱憤を晴らすかのような解放感で、この連休中の観光地、商業地などでは、どこも予想以上の人出、特に外国人の観光客の多さには驚くばかりです。

菊池さんのトイレの話、とても興味深くよませていただきました。連想ゲームではありませんが、日本を訪れる外国人観光客の皆さんがお土産に買いたいものの人気の上位を常に占めているのが、日本の清潔なトイレ(ウオシュレット)だとのこと。改めて、伊東のトイレのすばらしさをPRしたいですね。

第3回英語講演会で、Martinさんの講演、とても分かりやすい英語で、大好評でした。それに加えて、小西さんのとても詳しい解説のおかげで、航空事情に疎い私にもよく理解できました。ビジネスに、旅行にと、今日の私たちの生活には欠かせない重要な飛行機ですが、このお話がわずか7~80年前の出来事だということは驚きです。

Katieさん、素晴らしい英文でのお話、ありがとうございました。Katieさんといえば、ISGGでの歓迎会の時披露していただいた素晴らしい歌声が今もって忘れられません。文章の中にも述べられていますが、彼女の日本文化に対する興味・関心は半端ではありません。その中でも、お琴と着物は格別ようです。伊東のALTとして、これからも頑張ってくださいたいとおもいます。

最後に、加藤達雄さん、受賞おめでとうございました。加藤さんの真摯でとても親切な案内は私たちのお手本です。これからもよろしく願いいたします。

今回、大変発刊が遅れましたことをお詫び申し上げます。とともに、皆様からの投稿をおまちしております。(曾我廣子)

伊東市善意通訳の会 (ISGG)

会長 稲葉 尚子

(事務局) 413-0232

伊東市八幡野 1324-40 主原 一雄

e-mail : larryn@estate.ocn.ne.jp

<http://itosgg.info/>

(編集委員) 稲葉尚子、曾我廣子、加藤達雄